



寶山寺獅子閣

重要文化財

名称 ◎重要文化財 寶山寺獅子閣

概要 ◎建築面積=92.1平方メートル／2階
建寄棟造／車寄切妻造／桟瓦葺

棟札 ◎明治十五年十一月五日の記がある
／1枚

指定年月日 ◎重要文化財指定=昭和36年
3月23日(文化財保護委員会告示第16号)
[旧重要美術品よりの指定]

所在地 ◎奈良県生駒市門前町1番1号

建立の経緯 ◎獅子閣は、第14世乗空の発願によるもので、明治8年の聖天堂再建の際に、大工として働いていた越後出身の吉村松太郎の腕を見込み、すでに腹案として持っていた洋風客殿の建設のために、松太郎を横浜に留学させた。3年間の研鑽を終えた松太郎は、現在本堂前にある小社天神社の建立を命ぜられて改めてその腕のほどを認められ、獅子閣建設の棟梁に任じられ、寶山寺出入りの大工とともに建設に当たり、明治15年に上棟、同17年に落慶している。



建造物概要

獅子閣は主屋西面に玄関をつけ、総2階建で南面は開放のベランダ、その部分を懸造として、屋根は主屋が寄棟造、玄関は切妻造である。外部はいわゆる擬洋風で、漆喰壁に窓や出入口を開き、玄関とベランダの独立柱は礎盤上に立ち、フルーティングを彫り柱頭と脚部を精緻な彫刻で飾り、柱頭飾上に柱頭板を置きその上に歯飾と繰形軒蛇腹を用いている。



1階はアーチ中央に要石形の束を、下に彫刻の持送をつけ、ベランダ柱間は円形断面の繰形をもつ手摺を設けている。内部は1階南室が洋風で、壁面は漆喰の磨き仕上げ、天井を布張りにし、この室の西南隅に2階に昇る大胆な構造の木製螺旋階段が設けられている。木製螺旋階段は、柱以外は総松造りで、1本の柱に各段の踏板・蹴込板が組み込まれ、最上下段以外は宙に浮いたような造りになっている。仕口には精緻な加工が施され、手摺のねじれ加工も計算されたもので、組み付けは堅固、仕上げにいたるまで丁寧な仕事が窺える。北側の6畳2室は和風で各間とも床の間と押入を構え、東側に半間の階段室を設けている。玄関正面および背面と1階ベランダの出入口扉と欄間に赤・緑・黄朱・青紫の色ガラスを嵌め込んでいる。1階の窓は両開き、外側に鎧戸を釣り込み、上部は半円形のガラス欄間とする。

2階は10畳2室を並べ、上の間に半間の床の間・違棚・押入を設け、室境は襖で間仕切り篭欄間を嵌め込み、天井を格天井に納める。

木部は、見え隠れ部分と洋風部分の化粧材を松材、和風部分の化粧材と彫刻類を檜材と大きく使い分け、化粧材については刃物の切れが非常によく、幅広の松板材を難なく平滑研削している。床の間はこれら的主要木材とは異なり、タガヤサン・コクタン・シタンなどの南洋木材やカリン・トチノキ・ケヤキなどの堅木を使用し、一部は3mmほどの厚みの化粧板張りとして、刃物痕跡が確認できないほどの上等な研削を施したのち、光沢仕上げとしている。壁は、1ヵ所の押入を除くすべてが漆喰壁で、130年ほど経た現在でも、クリーニングにより十分な輝きを持つ優れた漆喰磨きである。中塗りから吟味された土を使用し、何層にも分けて下から徐々にきめ細かい土を重ね、上塗りの漆喰もわずか2mmほどの厚みの中に、2~3工程以上ある丁寧な仕事である。



金属製品は舶来品を多く使用し、獅子閣建築当時の日本では生産されていなかった鉄丸釘(洋釘)がふんだんに使用され、伝統的な和釘は一部分にしか使用されていなかった。しかも、伝統工法ではまず考えられない釘の頭をわざと見せるような打ち方で、当時目新しかった釘の頭を装飾として、窓・扉・軒蛇腹など造作関係の部材に使っている。扉の施錠装置・開閉装置もほぼすべて舶来品と考えられ、箱錠の見え隠れ部分に「USA」のロゴが確認されている。すべてマイナス木ネジにより取り付けられているが、これらにとどまらず、扉の額縁や板ガラスの押縁の止め釘としてもマイナス木ネジをわざと化粧として使用している。この建物は明治時代、洋風建築模倣のころの所産として文化史的意義が深く、しかも工作が優秀で使用材料も良好な点など、この種の建築中にあって一頭地を抜くものと評価できる。